

第2回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議 意見交換発言要旨

1 第1回推進連絡会議以降の動きについて

(1) 関係団体

(宮城県国公立幼稚園協議会 千葉事務局長)

- ・協議会として話し合ったのではないが、県内7支部の11園の代表からの報告によると、各園で「学ぶ土台づくり」推進計画の目標に沿った取組が行われている。例えば、地域の人々との交流、高齢者との交流、校種間・異年齢交流、地域の人材の活用、親子参加のプログラム、自然体験等における取組が積極的に行われている。保育参観でなく保育参加も行われている。しかし、放射能の影響で栽培活動や自然散策などができないでいる状況である。

(川島座長)

- ・現状における課題はないか。

(宮城県国公立幼稚園協議会 千葉事務局長)

- ・地域の交流や幼・小連携の連絡調整、地域の人材の洗い出し、地域の情報収集、保護者への啓発などに課題がある。

(川島座長)

- ・課題解決のために自治体へのリクエストはないか。

(宮城県国公立幼稚園協議会 千葉事務局長)

- ・園単独で地域の人材を見つめ出すのは難しいので、公民館などから幼稚園に働きかけをしてほしい。

(川島座長)

- ・自治体で人材のデータベースを整備しているので、積極的に提供してほしい。

(宮城県私立幼稚園連合会 吉岡常任理事)

- ・「学ぶ土台づくり」についての研究活動を連合会全体でできるように、共通する部分として生活習慣の実態を押さえ、次年度以降、地区ごと、園ごとの研究テーマにできないか検討に入っている。
- ・単園として、親の意識を変えるために、土曜日に親子一緒にボール遊びなどを行い、親子の絆を大切にしようとしている。また、保育園も幼稚園と同じレベルで幼児教育を推進していくようにしている。
- ・ルルブルの取組については、できるだけ単園へ足を運んで周知をしてほしい。

(宮城県保育協議会 齋常任協議員)

- ・1歳、2歳の子が夜11時に寝ている。子どもが一人でちゃんと寝るのが寝る時間とっている親が多い。
- ・親同士の交流が少ないので、親同士交流事業を積極的に行っている。

(気仙沼市家庭教育推進協議会 星会長)

- ・被災地における家庭の実情を踏まえた家庭教育の事業の進め方、内容について話し合った。その中で、親や家庭教育に関心を持つ方々が気軽に集まって講話を聴いたり、お茶を飲みながら話したりする場「子育てほっとサロン」を開き、託児所を併設して親が安心して参加できるようにした。講師は、親子間のコミュニケーション、触れ合いによる信頼関係や愛着関係の促進に寄与する必要があると考え、誕生学・親業・プレイセラピー・カウンセリング等の専門家を依頼することにした。
- ・今年から委員に子育てサークルの代表、子育てサポーター等、実際に子育て支援に関わっている方々に入っただき、家庭の状況等について、子育てをしている立場から直接話を聞くことで、子育てをする人の立場で事業展開を考えている。

(宮城県私立幼稚園PTA連合会 佐々木監事)

- ・前回、当たり前ができない親が多いという意見が出されたので、PTAの仲間と考えてみた。公園に行くとか不審者がいるとか、物があふれていて便利な社会になっているとかで、子育てがし難い時代になっている。その例として、子どもは雑巾が絞れないでいる。乾いたタオルを持たせて、それを幼稚園において水で濡らして絞らせるように、幼稚園に提案してみようと思っている。便利な社会にいると気付かないこともあるので、「こういうことをしてみてください。」と幼稚園に提案していきたい。

(川島座長)

- ・安全・安心な社会、これは社会全体の問題。便利な社会の中で自分たちがどう踏み止まっていくかという重大なポイントに気付いてくれたことは素晴らしい。そういうPTAの人が増えていくような仕掛けを私たちは考えていかなければいけない。

(教育企画室長)

- ・ルルブルについて、11月3日に村井知事と川島教授の対談を新聞に掲載したり、これまで色々な取組をしてきたがなかなか認知度が上がらないので、今後もホームページを活用したりしながら地道に広報活動を展開していきたい。また、企業への働きかけに力を入れて取り組んでいきたい。

(2) 県教育委員会

(生涯学習課 松崎主幹)

- ・「家庭教育推進協議会の活性化のためのネットワーキングを進めてほしい。」という要望に対する回答だが、家庭教育推進協議会は、現在は市町村ごとの活動になっている。始まりは平成16年で、そこから3年間、国から県への委託事業として行われたものである。本県は家庭教育推進協議会発足のための支援を行い、ネットワークをつくるための事業等を展開してきた。平成19年、文部科学省は3年間の普及活動を中心としたこの事業から家庭教育支援者養成や家庭教育支援チームの組織化などを主とした家庭教育基盤形成事業へ制度変更した。本県においてもこの制度を活用した家庭教育の普及啓発に努めてきた。その過程で家庭教育

推進協議会については市町村ごとに委ね、県としては家庭教育支援のための基盤形成事業を中心に行ってきた。現在は、家庭教育支援の充実を図るためのリーダーの養成や親等に対する様々な機会を活用した家庭教育に関する学習の機会の提供を目指しており、『子育てサポーターリーダーネットワーク研修会』という事業の中で家庭教育支援に携わる方々のネットワークづくりを展開している。今年度実施した研修会でも家庭教育推進協議会会長である星氏に出席していただいたが、今後もこの研修会に家庭教育推進協議会のメンバーの方々に参加していただけるよう声をかけていきたいと考えている。

- ・「NPOと地域と学校を結びつけるネットワークングができないか。」という要望に対しての回答だが、生涯学習課では、協働教育ネットワーク会議を開催し、教育応援団と行政が情報交換する会議を実施している。ここでは、教育応援団に登録している各種企業・団体・NPOが学校等に対し支援できることを行政に示しながらネットワークを構築している。これらを有効に活用しながら子育て支援を推進していきたいと考えている。
- ・「地域の大人が子育てを支援する仕掛けを施策として進められないか。」という要望に対しての回答だが、県は、平成21年に『宮城県協働教育推進宣言』を行い、それを受けて、県教委では、平成23年から地域全体で子育てを支援する仕掛け作りとして、協働教育推進総合事業を展開しており、市町村で実施している協働教育プラットフォーム事業がその展開例である。具体的には、『地域活動支援』で、地域が子ども育成に関わる事業（自然体験、世代交流など）を開催している。また、行政が中心となって家庭教育支援チームを立ち上げ、親子を対象として事業を展開している市町村もある。さらに、『子育てサポーター』の養成もしており、子育て支援を実施している。これらを有効に活用しながら子育て支援を推進していきたい。

(川島座長)

- ・現状としてやっていますのではなく、それをどうやってアクティブにして世の中を変えていくかということと認識してほしい。

2 ディスカッション

【テーマ：「夜9時には子どもが寝る社会を作るためにできること」】

(川島座長)

- ・今日のディスカッションは、生活習慣の中でも特に寝る時間をどうやってきちんと身に付けさせていくかについて、問題点を共有しながらどういう方向性があるかを議論していく。現状については、資料2（「幼児教育に関わる実態調査」の集計結果（速報版）について）の説明で、2%しか回答してくれなかった意識の高い方でも、9時以降に寝る子どもが6割を占めていることに大きな危機感を持たなければならない。学童期で一度リセットされ、小学校の中・高学年、中学校で崩れていくのが基本パターンで、学童に上がる前の幼児期において、子どもたちが家でしっかり寝るような社会を作るにはどうしたらよいか、課題はどこにあるのか、その解決のために私たちは何ができるのかについてディスカッションをしていきたい。

(早寝早起き朝ごはん実行委員会 in 宮城 石垣副実行委員長)

- ・民間レベルで「早寝早起き朝ごはん運動」のいろいろな活動を行っていて、その中で紙芝居を作り、演劇と組み合わせて、幼稚園や小学校などで上演もしている。
- ・親がしっかり寝かせていくことが大切である。そのためには家の中で朝早く起きる仕掛けをしていく。
- ・土日だと地域で朝早く起きる仕掛けができるが、人材や相談に乗ってくれる窓口が必要である。
(川島座長)
- ・朝起きて仕掛けを作りたいということだが、どんな仕掛けがあるとよいか。
(早寝早起き朝ごはん実行委員会 in 宮城 石垣副実行委員長)
- ・お父さんは毎日忙しいので、せめて土日は子どもと一緒に早く起きて外に出ていくプログラムを作り、子どもが行きたくなるような場を地域で作っていく必要がある。
(川島座長)
- ・そういうプログラムがあると参加するか。どういうプログラムだと参加したいと思うか。
(宮城県PTA連合会 佐藤常任理事)
- ・呼び掛けると参加は多い。興味はあるが、なかなかそういう機会がない。
(川島座長)
- ・早寝早起き朝ごはん実行委員会では学校側とのつながりはあるのか。
(早寝早起き朝ごはん実行委員会 in 宮城 石垣副実行委員長)
- ・メンバーに学校の教員もいて、学校との連携も図っていこうとしている。また、ベガルタ仙台や89ERSもメンバーになっていて、その選手と一緒に学校と連携を図りながら早起きにつながる事業も行っている。
(宮城県私立幼稚園PTA連合会 佐々木監事)
- ・野外の活動はなかなか体験させられない。以前、「みやぎで遊ぼう」みたいなものがあったが、友達と一緒にに行けるようなものがあるとよい。そこに幼稚園や小学校の先生がいるとさらに行ってみたいと思う。
(宮城県保育協議会 齋常任協議員)
- ・子どもが早く起きると困るという母親も多い。7時までに出勤する母親は、子どもを寝たまま連れてきて朝ご飯を保育所で食べさせてというケースも多い。
(宮城県私立幼稚園連合会 吉岡常任理事)
- ・幼稚園では子どもの方から「お腹が空いた。」と言ってくるので、食べてこないことが分かるが、保育園では食べてこないのが分かりにくい。
- ・保育園では就学が近くなると、夜早く寝るために後睡はさせないでほしいという要望が多くなる。目一杯活動している子はすぐに寝るのだが、スキンシップのために夜遅くまで起こしておきたいという親もいる。
(川島座長)
- ・地域での取組をしていかなければいけないのだが、現状として、私たちが明るく楽しくやっついこうとすると乗れない人たちの方が多いという現実をどうするかを考えていかなければいけない。そうした課題を共有できたのではないかと思う。

(銀河自然学舎 佐々木代表)

- ・夜9時には子どもが寝ることを考えるに当たり、これまでの意見は大人の視点であって、なぜ9時に寝ないといけないのかではなくて、学びの土台をつくる時期の子どもたちにとってどういう体験が大事なのか、発達段階で何が大事なのかを親が分かれば努力する。
- ・育てる環境が違ってきているが、不登校の子どもは、幼児期の関わりが欠落している。昼夜が逆転している。幼い時の体験が学びの土台をつくることを伝えることが大切である。
- ・遊びの中の体験が不足しているので、大人が意図的に環境を作ること、情報を伝えることが大切である。

(宮城県保育協議会 齋常任協議員)

- ・小さい時に基本的な生活習慣がきちんとできていると、中高生で夜遅くまで勉強しても必ず元に戻ることを親に教えてきたが、なかなか改善されない。親の研修会で知名度の高い講師の話だと聞き入れる。

(銀河自然学舎 佐々木代表)

- ・課題を抱えている子どもの親には個別の対応が必要である。
- ・便利な社会に危惧を感じる必要がある。例えば、オール電化に住んでいる子どもは、火を見たことがなく、キャンプで火を手でつかむ。また、親がカットされた食材を購入し、ハサミで調理をしているので、子どもが包丁を見たことがない。子どもたちの生活の中で火と刃物が消えている環境になっていて、文明の危機を感じる。

(宮城県児童館連絡協議会 小岩会長)

- ・児童館も子育て支援室のおしゃべり広場で、マイナス1歳から3歳の子どもをもつ親にアンケートを取ったら、全部の親が早く寝ない、早く起きないという回答をして驚いている。
- ・今の親は眠らせる努力をしていない。親が友達となっていて、カラオケに小学生を連れて行っている。親が子どもを育てる、育むという意識が不足している。
- ・児童館では生活習慣の大切さについて標語を作って啓発している。
- ・子どもとかかわる時間が取れない社会になっているなかで、仙台市内の児童館の運営時間が午後の7時15分に延長になったが、生活習慣の崩れが心配である。
- ・ワーク・ライフ・バランスも考えていかなければいけない。

(NPOまなびのたねネットワーク 伊勢代表理事)

- ・学校教育の場で、何で学んでいるのか、勉強しているのかなど、何でという意義を考える機会がなかったので、その延長として、何で早く寝ないといけないのかを考えることなく育ってきている。社会のなかの考えられる機会で見つけた人が意識を高く持っている。
- ・情報として提供することは大事だが、意識をしなければ意味がない。課題を抱えている子どもや家庭の対処的な問題と学ぶ土台づくりをするための予防的な問題を同時に取り組んでいかなければいけない。根本的にかかわる大人や地域や教育現場などで意識をどう高めているのかが大事であり、考える機会が少ない。
- ・研修会でよい話をインプットされても、自分がどう感じてどう考えそれをどうしていくかとい

うアウトプットの部分を大事にしていかなければ意味がない。考える場を設けるしかけ作りが必要である。

- 東北大学の学生に小さい頃何時に寝ていたかと尋ねたら、何もすることがなかった、昼間遊んで疲れたから9時頃には寝ていたという。今の子どもはインターネットや携帯、テレビゲームなどがあり視覚的に誘発されるものがあり、環境づくりも大事である。

(川島座長)

- 圏域別ワークショップみたいな形のディスカッションできる場を幼稚園のPTAのような集団でやっていくのが一つのよい方法ではないかという提案でした。一つのヒントとして、コーチングの技術で、みんなで考えてくださいと言っても考えないが、「後でこちらから指名して発表してもらいます。」と言うと考える。考えない人に考えさせる技術の一つである。

(東北大学大学院教育学研究科 加藤教授)

- どんな時代でも前の時代に比べると子育てが上手くいっていないように思えて歯がゆい思いになるものだと思う。虐待してしまうと言っている親でも「何とか子どもを育てたい、どうして上手くいかないのだろう。」という気持ちを根底に持っている。夜9時までに寝ることに対して「あなた、できていないですよ。」と言われると誰でも辛い。「こんな大変な中でも時々であっても、9時に寝かせられたとしたらどんなときだったろう?」、「何が起こった時だったの? どんな工夫でできたの?」など、劣っている状態からの出発ではなく、上手くいかないのだけれど何とかしようとしている中での出発として考えてあげると、子育てをしようとしている親に顔をあげてもらえるのではないか。
- イベント的なものもきっかけ作りにはとても重要である。乳児では無理だが、幼児以降になると、気軽に親を引っ張っていくのは子どもとなる。乳児で外へ出れなかった母親が、子どもがどうしても公園へ行きたいと無理無理連れられて行き、知らない親と話をしたりするようになるのは子どもの力によるものだと思う。子どもが朝やりたいこと、子どもにとって魅力的な朝の用事がきっかけとなる。
- 大事なのは日常的になっていくことなので、重いプログラムのものより、この5分でこれをしましようというような発想で、「寝る前の絵本ですよ。」「さあ、消灯で〜す。」などといった家の中でのちょっとした儀式を考える気軽さが大切である。
- 今の親が子育てをしていく大変さを受けとめながら、「お宅には何ができますか?」、「お宅にはどんな儀式が可能ですか?」と、それぞれに合ったプログラムが大事であり、できないから駄目ではなく、「全部は無理だったとしても、どんなところまでなら出来たのか考えてみようよ。」という寄り添いやフォローアップの中で話を聞いてあげることが大切である。親もほめられたいと思っているし、一緒に喜んでくれる人が横にいてくれると本当にやる気持ちになる。

(川島座長)

- 一番大きな課題は、なぜ子どもが9時に寝ないといけないのかということが共有されていない。これは社会全体でも地域でも家庭でも共有されていない。皆さんの中にここを何とかしていかないといけないという共通意識があった。

- ・ 解決策として、具体的にこういった活動があるということはたくさん出てきたが、これは積極的に拾い上げて推進してもらいたい。こういう機会を利用して一緒になって広く同じような活動をしていくことが今我々にできること。社会を変える、地域を変えるとなると、個別の活動では対処できない。
- ・ こうした県の会議の中身も含め、メディアを通して、「今の社会はおかしい。」ということ、なぜ9時に寝ないといけないのかという理由を含めながら啓蒙していかなければならない。
- ・ 技術論として、親に考えさせる講演会活動、研修会活動をPTAでも是非取り組んでもらい、受動的でなく、能動的に自ら考えてもらう時間を作り、参加者の意識を変えていくことが今日出てきた意見の中で拾い上げるべき意見ではないか。
- ・ 県では、親になるための教育として、高校生向きにDVD教材を制作中である。生命科学の学問を通して、なぜ子を産み育てることが大事なのかというところから入り、なぜ子どもに早寝早起き朝ご飯をさせないといけないのか、なぜ親子が愛着関係を強く持たないといけないのかをこれから親になる高校生に直接教育をするという取組をしている。今後5年、10年先に子どもを産む人たちへの教育を県と一緒に進めている。